

## 医療・救護

ド・ロ神父による知識の伝授

当時の医療用秤(ド・ロ神父記念館蔵)

当時の妊婦骨盤模型(ド・ロ神父記念館蔵)

19世紀から20世紀中期の間、フランス人の聖職者が田舎の地域で医療を提供することは一般的であり、ド・ロ神父も彼らの内の一人でした。日本での宣教活動のなかで、彼は、フランスでの神学教育の中で学んだ薬学や医療の知識を、長崎や外海の人々に伝えました。まず初めに、浦上の人々に赤痢や天然痘が流行したことを聞くと、フランスから薬を輸入しました。

出津で1885年に腸チフスが流行した際には、彼は出津救助院にて薬局を開き、診療を行いました。外海に赴任後に外海地方で1891年に出津の東の地域で赤痢が流行した際には、隔離病棟を建て、病棟を急いで作り、患者を隔離し、若いボランティアを募り、患者の世話をする青年救助隊を結成しました。また、外海の新生児の死亡率を下げるため、人体模型をフランスから取り寄せ、助産師達の教育を行いました。